

労働力の拡散を眺めるメルヴィル

竹内 勝徳

はじめに

ハーマン・メルヴィルの作品には現代のディアスポラを想起させるような登場人物が見られものの、多くの場合、そこには直接的、間接的な形で、アメリカのナショナリズムが介在し、それを背負わされた形で彼らの生きる境界領域が構造化されているように思える。そうしたシステムとしての航海、システムとしての捕鯨、システムとしてのディアスポラをメルヴィル作品に読み取るのが本発表に趣旨である。

1. 移住労働者たちのネットワーク

本発表では、まず、これまで注目されていないメルヴィルの第2作『オムー』におけるタヒチ島の移住労働者について論じてみたい。『オムー』の語り手とその相棒ロング・ゴーストは、オーストラリア船籍の捕鯨船における船員たちの扱いに異議を申し立てたため、タヒチ島パペテのイギリス領事に身柄を拘束されることになる。彼らは監視の目をすり抜け、農場での労働を求めて、タヒチ沖のイメオ島（現在のモーレア島）マアタに移動し、そこでアメリカ人農夫ジークとその相棒のイギリス人ショーティに会う。語り手とロング・ゴーストはそれぞれポール、ピーターと名乗り、ジーク達の農場で働き始める。この場面ではリーダーのジークが、終始“the Yankee”と形容され、そのアメリカ人氣質が強調される。その土地は最初から農地だったわけではなく、彼らが木を伐採し、切り株やその根っこを掘り起こすことで土地を整備してきた(206)。そのプロセスはアメリカ本土の西部開拓を想起させる。『オムー』で描かれるポリネシアの移住労働者は、船舶からの脱走を一つのルートとして、現地のネットワーク性やコミュニティ性を構築しつつ、そこに本国アメリカの特色を強く刻印し、移住や移民のルートを植民地主義的な色に染めてしまっているのである。

2. 植民地主義的移動ルート、労働者の移動ルート

重要な点は、しかし、メルヴィルはこうした移動労働者を描きながらも、必ずしもそれを肯定しているわけではない、ということである。なぜなら、『オムー』では、前述のジークとショーティが語り手とロング・ゴーストの雇用を延長したいと訴えるのに対し、語り手達は次のような超然とした態度で農場を後にするからである。“[W]e were far different from the common run of rovers: our society was both entertaining and instructive to a couple of solitary, illiterate men” (230). つまり、語り手にはどこかジークたちのビジネスを見下げた部分があり、その労働環境に同化できない自分が現れてくる。『オムー』では、ディアスポラの移動ルートがグローバリゼーション下の現代と同じく植民地主義的な色付けを受けている点を描きながら、そこに同化できない自我を提示することで、国家のイメージを背負っていない語り手やロング・ゴーストのような移動労働者が、ともすると植民地主義的な色付けを受けたディアスポラの集団に組み込まれ得る構造を示しているということではないだろうか。

3. 太平洋からパレスチナへ

メルヴィルの短編「エンカンタダス」の9番目のスケッチに、上述のジークの成れの果てと思えるような人物が登場する。太平洋はガラパゴス諸島に位置するフッド島で、そのオバラスと名乗る男は、『オムー』の語り手やジークと同じく、停泊した船から脱走し、農場を開いてじゃがいもの栽培を始める。そして、これもジークと同じく、そこに立ち寄る船舶にじゃがいもを供給することでビジネスを立ち上げるのである。ジークたちは野牛狩りの際にいわゆるブランダーバスという重たいライフルを使ったが(*Omoo* 219)、オバラスが常に身につけている武器もブランダーバスである(“Encantadas” 165-167)。オバラスはジークたちが示した植民地主義的態度を反復、強化したかのように、島にやって来る船員達を自分の住処に連れ去り、彼らを奴隷として使い、専横的な支配力を振るう。

こうした移動労働者の運命はメルヴィル晩年の大作『クラレル』においても繰り返されている。アメリカからパレスチナに移住したネイサンという人物は、イリノイ州で開拓に従事していたが、ユダヤ人女性アガルと結婚することで、ユダヤ教信仰に目覚め、パレスチナへの永住を決断することとなった。ネイサンは妻と子供をエルサレムの城壁内のユダヤ人地区に居住させ、自分はアラブ人との抗争を覚悟してシャロン平原で武装農夫となる。ここでもオバラスのようにライフルを離さずに(1. 17. 312)農場を開く人物があり、その人物がアメリカからはるばる聖地までやって来たときとされている。ネイサンには西部開拓のイメージが付きまとう。主人公クラレルは彼の娘と婚約をするが、ユダヤ教の服喪のため離れて巡礼を続けるうちに、その娘も亡くなってしまう。アメリカの特質を刻印された移住労働者の失敗が描かれ、悲しみを背負ったクラレルは行き先も告げずに聖地を去る。

4. 捕鯨船というコミュニティ

こうしたディアスポラとそれを包摂する植民地主義的システムの関係はメルヴィルの代表作『白鯨』においても特異な形で現れている。各船員は *Isolatoos*、すなわち、孤島のように孤立した一個人として生きている(121)。その個人が集まったコミュニティがピークオッド号であるということだ。そして、彼らを率いるエイハブ船長は、フランス革命時に外国人を率いて、フランス国民議会で全人類の共和国を訴えたアナカルシス・クローツに重ね合わされている(121)。しかしながら、ここで既に、孤島が集まるディアスポラの集団をアメリカ白人の頭脳が統括し、捕鯨業のシステムに組み込む構図が描かれているとも言える(“in all these cases the native American liberally provides the brains, the rest of the world as generously supplying the muscles” [121])。

トリニダード・トバコ出身の作家であり左翼活動家でもあったC・L・R・ジェイムズは、エリス島で入国を拒否され、長期にわたって拘留された際に執筆した卓越したメルヴィル論『水夫、裏切り者、漂流者』の中でこのことに言及し次のように述べている。“His candidates for the Universal Republic are bound together by the fact that they work together on a whaling-ship. They are a world federation of modern industrial workers” (James 26)。国籍を持たないピークオッド号の船員たちが、クローツの世界共和国構想のように集められているということである。しかし、同時に、彼らは近代産業の構造に組み込まれてもいる。ジェイムズは、エイハブ船長自身がその近代産業である捕鯨によって片脚を失ったことを挙げ、ディアスポラ的環境にある船員たちを率いながらも、エイハブが彼らを全体主義の中で支配していると述べている(61)。

ピークオッド号上の精油装置の描写についてジェイムズは次のように述べている。“[I]t is the world of massed bombers, of cities in flames, of Hiroshima and Nagasaki, the world in which we live, the world of Ahab, which he hates and which he will organize or destroy” (51)。国籍を超えたディアスポラ的環境にいる労働者が産業国のルートに組み込まれ、暗闇に突き進んでいく。エイハブは船員たちをこの世界で支配すると同時に、この世界を憎んでいるということ。それを彼の分身とも言えるモービー・ディックとの戦いにぶつけ、そこでピークオッド号が破滅していく。かくして、エイハブの憎んだ産業文明は国籍を捨てた船員たちもろとも破滅するという黙示録的結末へと展開していく。ディアスポラ的な労働者を率いたはずが、彼らを専横的に支配する産業構造を強化してしまい、さらに、そこに自己矛盾的な憎しみを感じるところから、自己分裂的な破滅を招いてしまったということになる。ディアスポラの移動労働者が植民地主義的ルートに乗せられるという矛盾が、エイハブ船長を通して近代文明の矛盾へと高められたのである。

引用文献

- Bolger, Stephen Garrett. *The Irish Character in American Fiction, 1830-1860*. Arno Press, 1976.
- James, C. L. R. *Mariners, Renegades, and Castaways: The Story of Herman Melville and the World We Live in*. Allison and Busby, 1953.
- Melville, Herman. *Clarel: A Poem and Pilgrimage in the Holy Land*. Edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP / Newberry Library, 1991.
- . *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*. Edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP / Newberry Library, 1968.
- . “The Encantadas, or Enchanted Isles.” *The Piazza and Other Prose Pieces, 1839-1860*, edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP / Newberry, 1987.
- . *Moby-Dick or The Whale*. Edited by Harrison Hayford et al., Northwestern UP / Newberry Library, 1988.